巻頭言

医学・医療の進歩と，働き方改革・自己研鑽

院長　臼　田　和　生

2020年から世界的に猛威を奮った新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は，私たちに大きな行動変容をもたらしました．マスク着用，移動の制限や自粛，密となる集会や飲食の自粛など，コロナ禍前では当たり前に行われていた活動が様々な影響を受けました．最新の医学知識を得る機会である学会や研修会も中止や延期を余儀なくされました．しかし現地開催に代わり，多くの学会や講演会，研修会がWeb開催やWeb併用のハイブリッド開催になりました．Webによる情報発信や知識の習得は，多忙な病院職員にとって移動に伴う負荷を無くし，時間を有効に管理活用できる方法として大変有効です．当院でも今年4月から全職員が利用できるWeb会議室を整備しました．

病院職員の時間管理を行う上で重要な制度改革が，2024年4月1日から適用される「医師の時間外労働規制」です．医師の働き方改革が推進される背景には，長時間労働が常態化し，かつ休日の確保が困難な医師が多いことがあり，健康被害防止や医療安全の観点からも必要な改革です．改革の中心となる時間外労働上限規制は，以下に示す医療機関の特性や医師の臨床経験年数に応じて，3つの水準ごとに異なる上限が設定されています．

・A水準：すべて診療従事勤務医

時間外労働上限：年960時間以下/月100時間未満（休日労働含む）

・B水準：地域医療暫定特例水準（救急医療など緊急性の高い医療を提供する医療機関）

時間外労働上限：年1,860時間以下/月100時間未満（休日労働含む）

・C水準：集中的技能向上水準（初期臨床研修医・新専門医制度の専攻医や高度技能獲得を目指すなど，短期間で集中的に症例経験を積む必要がある医師）

時間外労働上限：年1,860時間以下/月100時間未満（休日労働含む）

B水準およびC水準には，連続勤務時間制限28時間・勤務間インターバル9時間の確保・代償休息のセットが付帯義務とされており，2035年度末には暫定特例水準の解消が目標とされています．

労働時間を短縮するためには，タスク・シェア（業務の共同化）やタスク・シフト（業務の移管）など業務の見直しが必要です．タスク・シェアとしては，医師同士の分担を進めるための複数担当医制やグループ制，外来負担軽減のための病診連携の一層の推進などがあります．タスク・シフトについては，医療職全体が慢性的な人員不足にあり単なる移管では全体の業務量は変わらないので，必要な業務を整理したうえでチーム医療を推進することが必要です．看護師特定行為研修制度は，業務分担による医療・看護の質向上とチーム医療推進に大きな効果が見込まれます．診療放射線技師，臨床検査技師，臨床工学技士においても昨年の法令改正により業務範囲が拡大されています．

ところで，新たな業務知識や資格を習得するためには研鑽が必要になります．働き方改革では，自己研鑽に係る労働時間に関する考え方を明確にしなければなりません．原則として，①診療等の本来業務と直接関連性がなく②上司の明示・黙示の指示がない研鑽は，労働時間に該当しないとされています．厚生労働省労働基準局が示した「判断の基本的な考え方」として次の３つの類型が示されていますが，いずれも①自由意志に基づき②自ら申し出て，上司の明示・黙示の指示がない場合は，所定労働時間に該当しないと判断されます．【類型１】診療ガイドライン，新薬･治療法の勉強，手術や処置の予習や振り返り，シミュレーターによる練習等，新たな知識や技能を習得するための学習．【類型２】学会や勉強会への参加・発表準備，臨床研究のデータ整理，論文執筆，大学院の受験勉強，症例報告作成，講習会受講等，研究や論文作成．【類型３】手術・処置等の症例経験を蓄積するための見学等，手技を向上させるための手術見学．また，厚生労働省医師の働き方改革の推進に関する検討会では労働時間に該当しない事例として，「自己研鑽」では①自己学習，②症例見学，③参加任意の勉強会・カンファレンス，および「研究・講演その他」として①上長の命令に基づかない学会発表の準備，②上長の命令に基づかない外部講演等の準備，③上長の命令に基づかない研究活動・論文執筆，などを例示しています．当院においても，研鑽の労働時間該当性の明確化に係る手続きを進めているところです．

さて，この「富山県立中央病院医学雑誌」に掲載されている論文や，各分野の学会発表の要旨などを拝読すると，職員の努力により当院で行われている診療や臨床研究が，医療の向上や進歩に少なからず貢献していることが読み取れます．では，これらの論文執筆や学会発表等に費やした時間は労働でしょうか，所定労働時間外の自己研鑽でしょうか？深く考えすぎると区別が難しくなりますが，医療職は日進月歩の医療水準を学習し，新たな知識・技能を習得する研鑽を重ねることが必要だと思います．日常の業務の中から疑問に感じたことを調査・研究するという「Research Mind」も忘れずにいたいものです．